釣れ釣れなるままに

２０１３年思い出の釣行記 PART.　１５

鹿島釣狂

苫前港のコマイ釣り

「つりしん」では日本海のコマイが絶好調と告げている。羽幌港で２８㎝～３６㎝が２０匹超え。留萌市礼受漁港で３２匹、日中に好調。美国漁港で連日入れ食い６５匹、翌日も１０２匹コマイが向こう合わせでハリに掛かった。コマイに関してはここ数年よい便りが聞かれなかったが、どの港でも★が２つもついているのだ。

早速、仕掛け作りに精を出す。一般的な胴突きや遊動仕掛けにして、ハリス４号に１４号の丸セイゴを結んだ。また、コマセロケット付き天秤仕掛けも２組用意した。イソメは生よりも塩に食いが立ったとあるので、前日に生イソメを購入しエビ塩を振りかけておいた。

１２月２１日、コマイは夕方からの釣りなのだが、日中でも釣れているという情報に惑わされて、自宅を１０時に出発した。まず、留萌港古丹浜埠頭に立ち寄ってみる。連日、ニシンやチカ釣りで満杯のはずのこの埠頭で竿を出していたのはたったの２名だった。朝からやっていたが、コマイを釣ったのは誰もいないということだ。

次に苫前港に向かった。Ｔ字になった中護岸に釣り人がいたが、ここも駄目なようだ。そこから北防波堤の基部に釣り人が見えたので向かってみた。車の中で暖をとりながら竿先を見つめている３人にそれぞれ聞いてみたが、芳しくないようだ。北防波堤の先端に手ぶらで向かってみると、強い北風がまともに吹いていたが、赤灯台がその風をよけてくれて釣りができそうである。車に戻って荷物の準備をしていると、先ほどの御仁が近づいてきた。彼が

「先ほど話し掛けられたときは、どこかで見覚えのある顔だと思っていました。『北海道のつり』で記事を書いている鹿島釣狂さんですよね。鹿島さんが砂川の釣具店に来店していたと聞いて、店主に今度来たら、すぐ連絡をしてくれと頼んでおいたのだが、店がつぶれてしまって、それっきりになっていました。会えて嬉しいです。昨日から友人と羽幌港北防砂堤で駄目だったので、ここ苫前港に来たがさっぱり釣れません。昨日から粘ってたったの４本です。風が強く港内にも三角波が立っていましたが、ようやく落ち着いてきました。鹿島さんは現在も奈井江町にお住まいですか」と話している最中に、仲間から

「おまえの竿、アタっているぞ」と声が掛かった。竿を揺らしたのは３０㎝強のコマイで、カメラに収めさせてもらった。なんだか彼から元気をもらったような気がする。

砂川からの釣り人がコマイを釣った

因幡の白ウサギ

防波堤先端についた赤灯台の陰で風をよけながら釣り支度をする。１本目の竿にコマセロケット駕籠付きの仕掛けを付けて、コマセを入れようとバッカンを開けたがコマセが見あたらない。忘れてきてしまったのだ。コマセを掴んだ手を冷たい海水で洗うことが嫌で、ロケット駕籠に入れやすいようにと「楽ちん」と名の付いたチューブ式のものを買っておいたのだが・・・。コマセ駕籠は諦めざるを得ず、用意した胴突き２、遊動２の仕掛けを付けて、竿を全部出し終えた。

北防波堤先端で竿を出し終えた。事件の後はその手前側で竿を設置した。

防波堤の際を漁を終えた漁船が通った。一番先の竿がガタンと揺れる。慌てて竿に駆け寄ったが何事もなく通過した。次の竿も取り押さえてやり過ごす。そして次、竿がスーッと三脚を滑って出て行いったが、これも何とか持ちこたえた。最後の４本目には手も足も出なかった。一旦、三脚にリールが引っかかったが、その三脚を倒して海中に引きずり込み、波飛沫を立てて引っ張っていった。竿は年季の入ったものだったがリールが真新しいもので残念なことをした。しかし、よくよく見ると諦めかけたその竿が波間に浮かんでいる。道糸が切れたのだ。残っていた竿を１本引き上げて、仕掛けを付けたまま、漂う竿に向かって投げ込んだ。思わず力が入ってしまったのか思ったより随分遠くへ飛んでしまった。方向をコントロールしながらリールを巻いている内に、浮かんだ竿の道糸に引っかかってその道糸を引き寄せることができた。後はその道糸を手繰っていくだけだ。しかし、引っ張り込んだ道糸に投げ込んだ仕掛けが無闇に絡んでいた。それを解くのに手間取っていると、もう１艘の漁船が沖から帰ってきた。２本の竿はそのままの状態で三脚に立てかけていたので、これも漁船に引っ張り込まれたらと思い、慌てて駆け寄ろうとした。

「あっ、やってしまった！」ザクザクとささくれ立ったコンクリートの穴ぼこに躓いて転倒してしまったのだ。顔がコンクリート壁に向かって、みるみる近づいていく。両手が咄嗟に出たのはよかったが、しこたま両手と膝小僧を打ち付けてしまった。素手だった右手の手の平がささくれ立ち、血がほとばしり出ている。左手は軍手をはいていたのだが、その軍手が大きく破れており血がにじんでいる。おそるおそる軍手をはずしてみた。皮が

大きく捲れあがって、ワニに毛皮を毟り取られた因幡の白ウサギ状態だ。両膝も痛いが、綿の股引２枚の上に毛糸の股引、ジーパン、そして綿入れのズボンをはいていたので打ち身にはなっていたとしても傷はないだろう。まずは手の平の傷口を消毒しなければと、三脚に吊したバケツに入った海水で洗った。手の平にビリビリッと電気が走った。八十神に「海水を浴び、山の頂で、強い風と日光に当たって、横になっていることだ。」と騙された赤肌のウサギは、さんざんなことになったようだが、私は、この治療法が一番だと思っているのだ。

左手は皮が捲れあがって悲惨なことに。軍手をはいていたからまだこれだけで済んだ。

海水の消毒効果は？

海面に漂っていた竿に海水が入ってきたのか、今度は竿先だけを残して縦になって浮かんでいた。それを引っ張り上げた。三脚に残していた２本の竿は無事だった。まず、三脚を灯台の手前側に移動させて竿を立てかけた。これで座ったまま竿先が見える状態になった。竿先は強風に煽られて大きく揺れているが、灯台の陰になって座り込むと、全くそれを感じさせない。感じるのは赤裸になった手と膝小僧の痛さだけだ。

ガクッと竿がお辞儀した。リールを巻くとかなりの重量感だ。カジカだろうか。海面でバチャバチャと姿を現したのは、残念ながらドンコだった。また、竿先に風とは違う微妙なアタリが出た。今度は正真正銘の２８㎝程のコマイだった。またまた、竿先がお辞儀した。今度は糸ふけが出ている。思った通りその主は川ガレイだった。しかし、その下バリ

にコマイが付いていた。その後は、ドンコばかりが釣れてきて、ゼラチン質を思わせるその身体に嫌気がさしていると、そのうちにそのアタリさえ無くなった。

最初に釣れたのはドンコ

　する事もなくお握りを頬張っていると、ヘッドライトを照らしながらお客さんがやって来た。釣り状況を話していると、彼が「つりしん」レポーターの斎藤英治氏であることが判明した。私は、冒頭に述べたように、彼の記事を頼りにここに来ているのだ。更に今週は「留萌近郊でコマイ釣りを楽しむ」という斎藤氏の特集記事で火を付けられてしまったのだ。彼は、周辺のコマイ情報を集めに歩いていたのだが、何所も不調で２週間前に好調だったここ苫前港に来てみたのだという。私の竿にもアタリがないので、釣り談義の方に花が咲いた。べた凪の２日前には増毛港で竿を出したが、思いもかけずハゼが２６匹、コマイも６本あがったらしい。この時期にハゼがそれだけ釣れれば申し分ない。１昨年は年間１９６回の釣行だったというから、釣れた時ばかりではないだろう。２月の厳寒期の吹雪模様の日にクロガシラを狙った釣行記などを目にすることがあったが、私なら、釣りをしているのも嫌になる。特に、今日のように漁船に竿を引っ張られ、手に怪我をしたばかりの私にとっては、それが身に染みて感じるのだ。しかし、斎藤氏はそうではなかった。彼の言葉の端々からどんな状況においても釣りを心から楽しんでいるのがわかる。

　話に夢中になっているとガタンと音がした。いいアタリで竿尻があがったのだ。このアタリは、またドンコかなと思いながらリールを巻くと魚が付いていない。彼は、今のアタリはドンコのものではなく良形のコマイのアタリで惜しかったねと言う。何所までもポジ

ティブなのだ。それを切っ掛けにして、別の釣り場を求めて暗闇に消えていった。どこかでまた、大物コマイを馬鹿釣りするのだろう。ネガティブな私は、彼が去ったのを機会に竿を仕舞った。

家に帰ってから、風呂に入ろうと毛糸の股引を脱ぐと、その下の綿の股引２枚ともに血がべったりと付いている。おそるおそる股引をずり下げると、手の平よりも大きな傷口がポッカリと開いていた。風呂に浸かると、海水で治療した手の平の傷口は染みなかったが、足の傷の方は痛んだ。それで、海水の消毒効果は凄いと改めて思い知らされることとなった。

次の日、傷口がふさがらないので、魚の処理に困った。女房に話すと「ビニルの手袋がありますから、それをしたらどうですか」というので従わざるを得ない。川カレイは煮付けになった。この時期の川ガレイは臭みもなく真に旨い。その川ガレイに舌鼓を打っていると、女房が「私の魚に肉が付いていない。身がトロトロしていてもう一度煮付け直しても身が固まらない」という。よく見ると、いわゆる身の部分が全く無く、ゼラチン質でベロベロなのだ。釣り上げたときは随分身の薄い川ガレイだと感じていたが、何とも不思議なカレイなのだ。これでよく生きていたものだと思う。アタリだって明確に出たのだ。

次の日の夜中に左胸の肋骨が痛くて目が覚めた。痛む部分を見ると少し腫れている。躓いて転んだときに、胸も打っていたのだろうか。骨折しているように思えるし、筋肉痛のようにも思える。老化現象の骨粗鬆症で骨が折れてしまったのだろうか。それとも骨肉腫だろうか。まさかねえ。先日の健康診断では、どこにも異常がないとお墨付きをもらったのに・・・。もしかして、女房が残した川ガレイのゼラチン質を食べてしまったのがいけなかったのだろうか・・・。不安は深まっていく。

本日の釣果